

CAS	50293
物質名	p,p'-DDT
IARC Vol. (発行年)	53 (1991年)
遺伝子傷害性に関する知見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ in vitro 試験系では、細菌、真菌を用いた試験及びげっ歯類、ヒトの細胞を用いた複数の試験で陰性及び陽性を示したが、哺乳動物の培養細胞 (V79 細胞、CHO 細胞) を用いた試験で遺伝子突然変異を誘発し、ヒトのリンパ球で染色体異常を示した。</li> <li>・ 職業的な暴露を受けた労働者の血液で、血漿中の本物質濃度が高くなると末梢血リンパ球での姉妹染色分体タイプの異常が増加することを認めた。</li> </ul>
実験動物に関する知見	<p>評価：十分な証拠</p> <p>概要：マウスへ経口投与した結果、雌雄で肝細胞の腫瘍を、雄で胚芽腫を認めた。また、肺がん発生数の増加が1研究で、悪性リンパ腫発生数の増加が3研究で認められた。</p> <p>ラットへ経口投与した結果、雌雄で肝臓の腫瘍の発生数増加を認めた。</p>
ヒトに関する知見	<p>評価：不十分な証拠</p> <p>概要：複数の疫学調査結果から本物質への暴露と発がんとの関連性が示唆されているが、各調査における暴露情報が不十分なこと、がんの過剰発生率が小さいこと、及び調査間で発生率の大きさが異なることから評価が難しいとされた。</p>
評価結果	<p>上記のとおり、本物質は哺乳動物の培養細胞を用いる試験で遺伝子突然変異を誘発し、ヒトのリンパ球で染色体異常を示したことから、より詳細な情報収集を行う必要があると考えられた。</p>